

2021年5月9日佐土原キリスト教会・聖日礼拝・説教

聖書箇所：ヨハネ福音書18章1～11節

説教題：ただのひとりも失いませんでした

「人生は学校で、そこにおいては、幸福よりも、不幸のほうがよい教師だ」という言葉があります。あるいは「私達は、成功を通しては驚くほど学ばない、失敗を通して学んで行く」と言った人もいます。人生においては、順風満帆の生活よりも、山あり、谷あり、失敗もあれば、挫折も味わう、そういうところを通って行く方が、成長、成熟の可能性があるということではないでしょうか。それは信仰においても言えるのではないのでしょうか。宗教改革者マルチン・ルターが大学で教えていた時、学生が質問しました。「先生。神を学ぶために最も大切なことは何ですか」。ルターは「それは『苦難』だ」と即答したそうです。皆さんは今、具体的に人生の苦難に直面しておられるのでしょうか。もしそうなら、その渦中にある時は、とてもそうは思えなくても、それがやがて私達に「何か」をもたらす、そういうことを覚えたいと思うのです。

さて「ヨハネ福音書」は18章からイエス様の受難について記します。それは、弟子達にとっても苦難であったと思います。この箇所は「イエス逮捕」の場面を記しますが、単にイエス様が逮捕されたということだけを伝えるだけでなく、私達が経験する「苦難」についても教えてくれるように思います。「苦難の中で」というテーマで信仰の学びをしたいと思います。

1：神は耐えられない苦難は与えられない

イエス様と弟子達は、エルサレム市街地を出て、オリーブ山の麓にあたる「ゲッセマネ」と呼ばれる園に行かれました。イエスはそこで弟子達と良く会合をされたようです。だからイエス様を裏切るイスカリオテ・ユダは、イエス様がそこにおられることを知っていたのです。3節「そこで、ユダは一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて」(3)、園にやって来ました。「一隊の兵士」というのは、恐らくユダヤ人の神殿警備兵だと思いますが、ローマの兵隊だと考える人もいます。ある学者は、「一隊」という言葉から「少なく見積もっても200人位は来たのではないか」と言います。イエス様を逮捕するために、ユダヤ議会はそんなに大量の兵士を送り込んだのです。取り逃がしたりして騒ぎにならないように、一気に押さえ込もうとしたのだと思います。彼らは、手に手に「ともしびとたいまつ」(3)を持っていました。イエスが洞穴や物陰に隠れているから、灯りを照らして探して、捕まえようと思ったからです。

しかし、イエス様は、隠れるどころか、兵士の前に進み出られて「だれを捜すのか」(4)と聞かれます。彼らが「ナザレ人イエスを」(5)と答えると「それはわたしです」(5)と言われます。そしてもう一度「だれを捜すのか」(7)と聞かれ、兵士が「ナザレ人イエスを」(7)と答える会話が繰り返されます。「彼らはあとずさりし…地に倒れた」(6)。それは、彼らが意表をつかれて驚いたからでしょう。しかもイエス様は「それはわたしです」と言われますが、この言葉は、「旧約」の「出エジプト記」で神様がモーセに現れた時、「わたしはある」(出エジプト 3:14)と言われた言葉と同じ言葉です。恐らく最前列にユダヤ人の神殿警備兵がいて、捜さなければ見つからないはずのイエスが、彼らの前に堂々と姿を現して、しかも、神の自己紹介の言葉である「わたしはある」という言葉を語られるのを聞いて、彼らはイエスの姿勢と言葉に圧倒され、思わず後ずさりして、よろめくように倒れたということでしょう。

しかし、ここで大事な点は、なぜイエス様は「だれを捜しているのか」と2回も言われたのかということです。それは、2回「だれを捜しているのか」と問い、2回「ナザレのイエスだ」と

言わせることによって、兵士達に「自分達の目的は、イエスを逮捕することだ、目当てはイエスだ」と確認させたのです。イエス様が確認させたから、弟子達は、いわば共犯者でありながら、逃げる事ができたのです。ではなぜ、イエス様は弟子達を逃がしたのでしょうか。色々な理由があったと思います。弟子達は、やがて伝道の責任を負わなければならない人達でした。しかし、それだけではなくて、もしここで彼らが逮捕され、裁判に掛けられ…ということになったら、弟子達はその試練を耐えることが出来なかったからではないでしょうか。きっと公の場で、イエス様を否定したでしょう。命が惜しくなって「助けてくれ」と言ったでしょう。「私はイエスに騙されていた」と言って身の安全を図ろうとしたかも知れません。そうするとどうなるでしょうか。彼らは、公の場所で決定的に裏切ることになります。もう二度と立ち上がれない失敗を仕出かしてしまうことになるのです。イエス様は、弟子達がそのような場に立たされることがないように、弟子達をその苦難から逃れさせたのではないのでしょうか。彼らが耐えられない苦難に遭わなくても良いようにされたのではないのでしょうか。

私は「1 コリント 10 章 13 節」の御言葉を思います。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてください」(1 コリント 10:13)。この通りのことを、イエスはここでなさっているのです。

私達は、試練がやって来たとき、しばしばその困難さを思っとうなだれます。しかし聖書は「神は真実な方です」と言います。神が真実な方であるなら、神を信じて生きようとしている私達を、裏切るようなことをされるはずがありません。私達に試練が、苦難が、やって来たら、それは、私達がそれに耐えられるから、神はその試練を敢えて許されたと考えることも出来るのではないのでしょうか。いや、そう考えたい。そう考えた時、私達の姿勢は変わるのです。

アポロ 13 号の話をよくします。アポロ 13 号は、3人の飛行士を乗せて月に向かう途中で大事故を起こして、地球に帰ってくるのも絶望的な状況に置かれたのです。しかし3人の飛行士は無事に帰って来ました。彼らが帰ることが出来た理由は、もちろん、地上のスタッフが、地上から最善の指示を送ったことでもあります。1番のポイントは、3人の飛行士達が諦めなかったことです。彼らは宇宙船の中で「試練とともに、脱出の道も備えて下さい」(1 コリント 10:13)という聖書の言葉を読んで「神が守って下さるから絶対帰れる」と言って決して諦めなかったのです。そうやって彼らは、多くの人々の努力、祈り、神の言葉に支えられて帰ってくるのです。神が脱出させて下さったのです。インターネットで面白い記事を見つけました。県内のある小学校の校長先生は、その当時小学5年生でしたが、担任の先生が教室でテレビをつけたら、ローマ教皇が世界中の人にアポロ 13 号のための祈りを呼びかけていたというのです。そして彼も良く分からないまま祈ったそうです。そしてアポロ 13 号は帰って来た。その経験から最近の「校長室便り」に「祈りは聞かれます。明日の遠足のために、晴れになるように祈りましょう」と書いておられました。

いずれにしても、神は耐えられない試練は与えられない、さらには、その試練を通して私達に何か善きものを与えて下さる、そう信じるのです。その時、神は、最後には、私達が必ずそこから逃れることが出来るように、ちゃんと脱出の道を備えて下さるに違いないのです。私達がそこに立つ時、それは、試練の中で私達を支えて行くのではないのでしょうか。

2：苦難も神の御手の中にある

弟子のペテロは、無我夢中でということでしょうか、神殿警備兵の一人に斬り付けます。イエス様を守ろうとしたのかも知れません。しかしイエス様は「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう」(11)と言って、ペテロを諫められます。

「新約聖書」には4つの福音書があります。それぞれの福音書を書いた人達は、「自分はイエス様のこの部分を特に伝えたい」という、それぞれの思いを前面に出して書いています。だから4つの福音書は、同じ出来事を扱っても、ニュアンスが微妙に違います。この「イエス様逮捕」の出来事にしても、ヨハネには彼の伝えたいイエス様の姿があるわけです。それは何かというと「イエス様の逮捕という場面においても、イエス様が主導権を握っておられた」ということです。つまり「イエス様は、兵士に見つかってしまって、仕方なく捕まって、そして引いて行かれた」ということではないということです。確かにイエス様を捕らえたのは、兵士でした。イエス様は、捕らえられる立場でした。しかし、勢いに圧倒されて地に倒れたのは兵士の方です。立っている者と、倒れた者と、どちらがこの場を支配しているかと言えば、当然、立っている方です。つまりヨハネは、イエス様が逮捕されるこの場面においても、イエス様がここを支配しておられた、ということをお伝えしたかったのです。神の支配があったのです。

イエス様が、伝道の初めに故郷のナザレの会堂で説教をされた時、皆が怒ってイエス様を崖から突き落とそうとしたことがありました。しかし、その時イエス様は、皆の真ん中を通り抜けて行かれたのです。イエスご自身が捕まろうとしなければ、兵士が何百人来ようが、イエス様を捕まえることは出来なかったはずです。イエス様が、ご自分で捕まろうとされたのです。では、どうしてそうされたのか。それは「父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう」(11)、大祭司でもない、議会でもない、神ご自身がこの一切のことを支配しておられると知っておられたからです。

そして、ここでご自分が犠牲になって、弟子達を救われたように、イエス様は、ご自身が犠牲になることによって、私達を永遠の滅びから救おうとされたからです。それが神の計画であることを知っておられたからです。「あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした」(9)という言葉は、私達の救いを象徴しているのです。神が招いて下さった私達は、失われることはないのです。肉体の死を迎えても、失われることはない。それが神のご計画だからです。

私が教えられる2番目のことは、どのような苦難(試練)がやって来ようが、例え、神が一切関わっておられないように感じるような試練の中にも、その場でさえも、最終的に支配しておられるのは神様である、イエス様である、ということです。神は言われます。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」(ヘブル 13:5)。「決してあなたを離れず」と言われるのです。これは、神が私達に語られる約束です。

ではなぜ、試練や苦難があるのか。それは分かりません。しかし、繰り返しますが、私達が苦しんでいる、そこは神に見放された場所ではない、そこにも神の御心は流れていて、神の御手は届いているに違いないのです。

「創世記 28 章」に「信仰の父アブラハムの孫のヤコブが、ベテルという所で夢を見る」話があります。兄のエサウを騙して、また父親をだまして「長男としての祝福」を手に入れたヤコブは、兄エサウの激しい怒りを買って命からがら家を逃げ出します。そして伯父さんの家に向かいます。家も、家族も、安定した生活も、何もかも無くして「体1つ」、これからどうなるのか、そんな「人生のどん底」にいた時、彼はベテルという所で野宿をします。石を枕にして寝るとい

う惨めな状態でした。神の御手等、見えなかった。しかし、そこで彼は夢を見るのです。天と地を結ぶ梯子(階段)があって、そこを神の使いが上り下りしているのです。その時、主がヤコブに現れてこう言われます。「わたしはあなたと共にあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」(創世記 28:15)。眠りから覚めたヤコブは言います。「まことに主がこの所におられるのに、私はそれを知らなかった…こここそ神の家にはかならない。ここは天の門だ」(創世記 28:16~17)。ヤコブが打ちひしがれて横たわっていた場所、まるで世界のどん底だと思っていたところが、実は天に触れる門だったのです。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった」(28:16)。自分の抱えている惨めな、苦しい状況に、神が関わっていて下さるとは、思えなかったのです。しかし、神は、そこにも臨んでいて下さったのです。そこも、神の支配しておられる場所だったのです。その神の臨在の約束が、この後のヤコブの人生を支えて行くのです。

イエス様は、ある時、弟子になるナタナエルにこう言われました。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます」(ヨハネ 1:51)。この言葉を次のように解釈している文章を読んだことがあります。「私に従う時、人生のどん底だと思えるその時、その所に、私を通して、天の梯子が届いているのを、あなた方は経験することになる」。希望の言葉だと思って読んだことでした。

さらにまた、私達が神の前に遜って、神を求める思いになる、そして、そこで神の業を見せられる、そういうことも、しばしば試練や苦難の中で起こるのではないのでしょうか。大事なことは、私達が「そこも神の御手の中である」ということを—(渦中にいる時は難しいですが、しかし)—忘れないことだと思うのです。神は「あなたを見捨てない」と言われます。いつでも、私達の真の導き手、支配者として私達のところにおられるのです。苦難や試練はやって来ます。しかし「私はどんな時にも神の御手の中にいる」という信仰、そこに私達を試練や苦難に耐えさせ、乗り越えさせていく道、いや、神による救いに与る道があるのではないのでしょうか。

3: 終わりに

今日、2つのことを申し上げました。「神は耐えられない苦難は与えられない」、「苦難も神の御手の中にある」。生きている限り、苦難から全く解放されることはないでしょう。しかし、私達には神がおられます。神様との交わりを新たにしつつ、神様の助けによって苦難を乗り越えさせて頂きましょう。